

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520443

研究課題名(和文) 北奥羽方言におけるアイヌ語アクセント型の残存の蓋然性についての実証的研究

研究課題名(英文) A Study on the possibility of Ainu accent patterns seen in the Kitaou dialect of Japanese

研究代表者

板橋 義三 (Itabashi, Yoshizo)

九州大学・芸術工学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50212981

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：本年度は予定通りに著書刊行した。平成21年度から24年度までのフィールド調査の結果をまとめ、それを著書の一章として取り込み、以前の2つの科研費による調査(H12-H15「樺太アイヌ語の母音の長短と北海道アイヌ語の高さアクセントの史的関係の解明」(H16-H19「東北地方におけるマタギ語彙の研究とマタギ語辞典の編纂」)を基盤として一章として組み入れた。その他アイヌ語に関する論文やそれを傍証する遺伝学、人類学、考古学、地名学などを援用し、学際的アプローチから上梓した。著書名は「アイヌ語・日本語の形成過程の解明に向けての研究」地域言語学、言語類型論、通時言語学を基盤にした学際的アプローチとした。

研究成果の概要(英文)：The results of the fieldwork of 2009 through 2014 have been summarized as a book with some other additional chapters, which titles "A Study toward the solutions to the formation of the Ainu and the Japanese language"-An inter-disciplinary approach in addition to the basis of areal linguistics, linguistic typology, and diachronic linguistics-

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：北奥羽方言 アイヌ語のアクセント 方言アクセント 基層 危機に瀕した方言

## 1. 研究開始当初の背景

金田一春彦(1965)は北奥羽方言(青森県から岩手県の海沿部にかけての地域)のアクセントがアイヌ語との関係があるという蓋然性を示唆している。北奥羽方言においては、他の近隣方言ではアクセント型が平板型(LL型)となっている型に対して、この平板型に対応するのは最後の音節が高または低(LH型;HL型)に変わるとしている。これはアイヌ語のアクセント型には平板型(LL型)が存在せず、語中に高音節が必ず1音節1個あるという性質(LH型;HL型)に由来しているのではないかとしている。ただし、問題になるのは実際にどの地域の方言を取り上げて分析したのかが明らかではない。単に北奥羽方言とはいっても広範囲であり、そのすべての地点での方言現象なのかどうかとも知ることができない。

北奥羽方言は特異なアクセント型であり、その周辺の方言のアクセント祖型から体系的に東北北部方言のそれに变化したという東北方言内部の要因によるものではない。これは平板型がそれぞれ2つの異なった型(高低型と低高型)に変化するということはありません、変化するとすれば1つの変化(例:高低のみ)するものである。即ち、これは何らかの力、例えば、周辺の方言や他の言語などの言語接触、が加わったためと考えるのが最も妥当な考え方である。

## 2. 研究の目的

本研究ではより孤立した海岸域を中心に、青森県の下北半島から岩手県の宮古以北までの沿海方言(北奥羽方言)において、単音節、二音節、三音節の語(名詞、動詞、形容詞)のアクセントから談話レベルの文アクセントまでの語彙・談話文を出来る限り収集し、それぞれの品詞のアクセント型を詳細に分析する。

次にその年次に調査した方言のアクセント体系の中で平板型の有無を調べ、その型が

アイヌ語のアクセント型と同様であれば、アイヌ語のアクセント型の残存であると同定していかどうかを再究明し、判断する。もし異なっていれば、どのように派生したかを追及し、その原因を究明する。

4年間の全調査が終了した後、北奥羽方言のアクセントがアイヌ系言語のアクセント型の残存したものかどうかを見極める。最終年度である平成24年度にこれまでのアクセント、談話データをすべて纏め上げ、報告書として刊行する。さらに最終年度にはこの仮説が正しいことが実証された場合、本テーマを中心に、北海道アイヌ語の高さアクセントと樺太アイヌ語の母音の長短の史的関係、マタギ語の中のアイヌ語、北奥羽地方のアイヌ語地名、さらにはアイヌ人の遺伝子の研究成果なども援用して、「アイヌ語の周辺地域への拡張」と題して著書としてまとめ、「現代図書」から出版する予定とした。

## 3. 研究の方法

調査する語彙は予めリストを作成準備し、そのリストに従って、調査する基礎語彙は一拍語から五拍語まで200項目程度(名詞、動詞、形容詞とそれぞれの品詞の単独形と接続形)のアクセントだけに焦点をあわせ、読み上げ調査を行い、収録した。

次に語彙・意味だけでなく文レベルに渡り調査したが、その領域は一拍語から五拍語までの動詞、形容詞、名詞(それぞれ単独形、接続形を取る)の基礎語彙を取り上げ、語彙や談話をビデオに収録すると同時に高感度マイクで別に録音する。語彙項目を発音してもらった後に対話や面談も行った。

平成21年度から4年間、調査・収録した単音節から五音節までの語(名詞、動詞、形容詞とそれぞれの品詞の単独形、接続形[~が、~ね]が異なるものを作成したもの)のアクセントから談話レベルの文アクセントをアクセント型に従って、詳細に分析し、その方言のアクセント体系の中で平板型の有無を調べる。もしある場合には平板型がいつ生じたのかを調査し、他の周りの方言(北部東北

方言)と比較し、もしそれが最近であることが判断できれば、それ以前はどうであったか、できる限り追及する。平板型がない場合にはどのような起伏型に対応しているのかを詳細に調べる。

#### 4. 研究成果

アイヌ祖語との関係を知る手がかりになる北奥羽太平洋沿岸地域に見られる、平板型のアクセントは他方言などの類型から派生したものであるという考え方も可能ではあるが、

下記に詳述するように、周辺の方言(北部東北方言)はすべて低ピッチのアクセントをもつ平板型であるため、方言借用は難しいと考える。また、北奥羽地方は奈良時代の文献からも分かるようにアイヌ語地名が連綿と残存し、アイヌ語アクセント型と同様であることを考慮すると、これはアイヌ語のアクセント型が残存したと仮定することができると思われる。

北奥羽方言、北部東北方言のアクセントとアイヌ語のアクセントの対応表

	日本人 (北奥羽方言)	日本人 (北部東北方言)	語例	アイヌ人
2モーラ語	○型	○型	「秋」「降る」「火が」	○型
2モーラ語	○型	○○型	「日が」「押す」	○型
2モーラ語	○型	○○型	「風」「置く」	○型
2モーラ語	○型	○型	「山」「雨」	○型

( L は「低」、H は「高」; L<sup>1</sup>は助詞が「低」、H<sup>1</sup>は助詞が「高」)

日本人の北部東北方言(北奥羽方言の周辺の方言)の平板型(○○)はここで問題の北奥羽方言では頭高型(○)か尾高型(○)のどちらかに変化しているという報告がある(金田一 1965)。アイヌ語にはこの○○型(「低低」の平板型)がないので、アイヌ人はそれを頭高型(○)か尾高型(○)のどちらかとして受け入れ、その型が後の日本語に(基層として北奥羽方言に)残存した可能性が高い。日本語の一、三拍語の平板型についても同様である。

フィールド調査では最低限調査する語彙は予めリストを作成準備してあり、そのリストに従って、調査する基礎語彙は一拍語から五拍語まで200項目程度(名詞、動詞、形容詞とそれぞれの品詞の単独形と接続形)のアクセントだけに焦点をあわせ収録した。

平成21年度から平成24年度までの調査結果として、北奥羽地方では、津軽海峡から太平洋岸の岩手県境までの9か所すべてにおけ

る北奥羽方言には、周辺の北部東北方言のLL平板型が存在していなかっただけでなく、特殊アクセント型(LLの平板型に対応するLHまたはHLの起伏型)を示さず、すべて東京方言の平板型(LHH<sup>1</sup>)になっていることが分かった。

この結果から、その可能性として見ると、周辺の北部東北方言の平板型のアクセント型が本来の型である、あるいは逆に、北奥羽方言の起伏型のみ(周辺の北部東北方言の平板型は本来LHとHLなどの起伏型から派生して形成された新しいアクセント型であるとする)の2つの可能性しかない。どちらかが正しいとしてもこの結果から考えられることは、実際に東京方言の平板型しか現れなかったため、読み上げの語や文が共通語(標準語)にすべきという意識から、北奥羽方言(または北部東北方言)を日常は維持するものの、読み上げの時だけ東京方言のL

H平板型が現れた、とするか、どちらの方言も消滅し、読み上げの時だけでなく日常でも東京方言の平板型に移行していた、のどちらかである。本来、どちらの方言でも全く同じ東京方言の平板型を示したことやほかの地区の北奥羽方言の被験者がすべて東京方言の平板型を示したことから、単純に調査時のみアクセントが変化したとは考えられないため、北奥羽方言でも北部東北方言でも同じ東京方言の平板型(LHH<sup>j</sup>)に移行したと見ることができる。従って、アイヌ語の残存要素がすでに見られなくなっていると言わざるを得ない。

またその消失時期であるが、金田一の論文が1965年に刊行されているので、その時期には残存していたと考えてよいことから、最も早くて1960年代後半と考えられる。しかしながら、この消滅はテレビなどのマスメディアの普及による可能性もあるかもしれないという可能性は後述することにしておくが、被験者の年齢から考えると、時代的には80代の被験者は1960年代には30代であったから、その年齢では言語習得の臨界期後であることはもちろんのこと、すでに方言のアクセントは固定化している。また被験者はすべてその土地生粋の者であり、長期にわたって他の土地に移り住んだことがないため、その方言しか話さなかったと見ることができる。また、その方言と東京方言の方言併用者は当時一般にはほとんどいなかったと考える。従って、北部東北方言の被験者も北奥羽方言の被験者もその方言のアクセント型を固定化していたと考えるのが妥当である。このことからさらにわかることは、もしこの考え方が正しいとすると、この北奥羽方言の被験者たちと北部東北方言の被験者たちが異なった方言を習得したにも関わらず、すべて同じ東京方言の平板型を習得し、今回の調査時に限って東京方言の平板型が露出したというこ

とはありえないのではないかと考える。アクセント型は一般には最も保守的な言語の側面であるということが既に了解されていることもそれを裏打ちするものである。即ち、すべての被験者が調査時だけ東京方言の平板型を使用したことになるが、それを可能にするには被験者全員が東京方言との方言併用者でないといけないことになり、それも東京方言がきちんと習得されたという前提に立たないといけないので、それは当時は不可能であったと考えられる。そのほかの可能性として考えられるのは「アクセントのゆれ」であるが、後述するように、80代の被験者全員が、北部東北方言と同じ平板型(LLL型)のアクセント型を持つと同時に東京方言の平板型(LHH<sup>j</sup>型)をゆれとして持っていた、という可能性はないかということである。しかしながら、万が一その両方言を完全に習得したとしても、その平板型は平板型でも全く異なる平板型であるため、ゆれ幅は非常に大きく、その使用の仕方をコントロールすることはできなかったとしか考えることができない。つまり、「アクセント型のゆれ」の可能性はないと考えてよい。よって、北奥羽方言の被験者たちも北部東北方言の被験者たちも異なった平板型の有無のある方言を話す人たちが同じ東京方言の平板型のアクセントまで真似て発音できたという蓋然性はほとんどないはずである。そのことはとりもなおさず、北奥羽方言の被験者、あるいはもっと一般的にその話者と、北部東北方言の被験者、あるいは話者は同じアクセント型を持っていないといけないはずである。これは一番初めに前提としてその可能性を選択肢として2つ考えたが、北奥羽方言のアクセント型が本来の型か、あるいは北部東北方言のアクセント型が本来の型かを問うと、これは前者(北奥羽方言の特殊アクセント型)の蓋然性はほとんどなくなってしまい、後者の可能性しかない残らないことになる。

さらに今回は本稿の中心課題ではないが、最終的に東京方言の平板型アクセントをどのようにして習得していったかという別の問題が浮上する。上述したマスメディアの影響と調査者と被験者との調査時の心理的な不安による「東京方言の自動強制」も考慮する必要があるかもしれない。この前者の可能性は長期にわたっているのに、実際にはその影響の大きさが計り知れないものからも知れないが、現時点ではそれを検証することは可能かもしれないが、今回の9か所の地域での更なる調査はほとんど不可能に近くなってきている。それは被験者の更なる高齢化による調査の可能性がなくなっていることによる。また後者に関しては被験者の心理的不安によるものは個人によってだいぶ異なると考えてよいことから、一様な東京アクセント型を示すことが考えにくく、よってこの可能性は非常に低いと考える。

以上の議論から最終的に明らかになったことは、北奥羽方言の「特殊アクセント」、即ち、平板型はないため、例えば、二音節語であれば、HLかLHの2つの起伏型のアクセント型しか可能性としてなかったのではないかという、金田一(1965)の考え方に対する疑惑である。

実際に金田一はいつ、どの地区の、どの被験者に協力をえたのかなどの具体的な情報は論文には一切載せておらず、果たして本当にこのようなアイヌ型のアクセント型を北奥羽方言はもっていたのかは疑問である。しかし、後継の方言研究者の上野(1977: 299-301)などは青森県野辺地の西側、即ち、津軽藩が支配していた地域もこの金田一の考えに沿って方言研究が進めてきたと述べており、その後はその考え方自体に疑問を呈するような見方がある。

換言すると、当時存在したのは北部東北方言のみで、北奥羽方言は存在しなかったの

ではないか、ということである。前述したとおり、下北半島一帯はすべて「低」の平板型をもつ北部東北方言のみが歴史的にも方言学的にも支配してきたのではないかと考える。

現時点における暫定的な結論として、この調査地点4か所における北奥羽方言の特殊アクセント型(LH/HL; LHL/LLHなど)はすべて乙種(東京方言)平板型にすべて移行してしまっていることを示している。これはとりもなおさず、アイヌ語アクセント型が消失したことを示すと考えられる。

万が一、金田一の調査結果が正しい、即ち、北奥羽方言にアイヌ語のアクセント型が見られたと仮定した場合、北奥羽方言の特殊アクセント型の消失時期は、2012年時点で80歳の人には1964年頃は30歳であるから、地域に関しては現時点ではまだ特定できないが、広範囲またはすべての地域が可能性として挙げることができる。また、その消失時期に関しては金田一の論文が刊行された1965年以降あまり遅くない時期となると考えるのが妥当であろうと考えていたが、前章の考察からもわかるように、この考え方には大きな問題があることが明らかである。よって、最終的には金田一の北奥羽方言の特殊アクセントというものはなく、誤りであったという結論に至った。

#### 参考文献

- 五十嵐三郎 1986「北海道方言の概説」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一(編)『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 井上史雄 2000『東北方言の変遷』秋山書店
- 上野善道 1977「日本語のアクセント」『岩波講座 日本語 5 音韻』岩波書店 pp. 281 - 321
- 小野米一 1993「アイヌ語話者の日本語北海道方言についての研究」文部省科学研究費一般研究(C)成果報告書
- 金田一春彦 1965「北奥羽方言におけるアイヌ

語の substratum の例」『日本語の方言』教育出版

此島正年 1986「青森県の方言」 飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一（編）『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

藤原与一 1990「日本語方言分派論」武蔵野書院

村崎恭子 1993「日本語アイヌ語二重言語話者の音声の収集と研究」、杉藤美代子代表 文部省重点領域研究 『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』

山口幸洋 1998『日本語方言一型アクセントの研究』 ひつじ書房

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

板橋義三 2011「北奥羽方言におけるアイヌ語アクセント型の残存と蓋然性について」東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2011年11月4日、フランス、パリ大会

〔図書〕(計 1 件)

板橋義三 2014 『アイヌ語・日本語の形成過程の解明に向けての研究 - 地域言語学、言語類型論、通時言語学を基盤にした学際的アプローチ - 』現代図書

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

板橋義三 (Yoshizo ITABASHI)

九州大学・大学院芸術工学研究院、教授

研究者番号: 50212981

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: